

主要な動力源として大活躍

－ 水車 －

■コトコトコトンと回り続ける

「コトコトコトン コトコトコトン」のフレーズで愛唱されてきた「森の水車」、年配の方であれば一度は口ずさんだであろう。この歌からは、米搗き、粉挽きで活躍した水車を思い浮かべるであろうが、明治以降は、とくに繊維（ガラ紡、撚糸、反毛等）、製材、揚水（ポンプ）、線香製造、岩石や陶土粉碎など、機械の動力源として活躍することが多かった。

水車の形式には、在来型とも日本型とも呼ばれる大輪形式のものと、欧州から伝わった洋式水車がある。タービン水車とかフランス水車など洋式水車の多くは電力用として普及し、今も発電所で広く使われている。ただし洋式水車は地下に設置されることが多く人目に触れることは少ない。



直径 6.2m の反毛用水車
(岡崎市、2004.4 筆者撮影)

直径 6m を超す巨大な水車が設置された。製材用の水車も同様に大径のものが掛けられたが、より大動力を得やすいタービン水車を設置する製材工場もあった。そこでは昼間は製材、夜間には発電用として近隣地域に供給する工場も少なからず見られた。農業用には足踏み式の踏車と呼ばれる揚水水車も田圃などで活躍した。



川筋に残る製材用水車（新城市、1986.6 筆者撮影）

■地場産業や地域を支えた動力水車

全国一を誇った矢作川流域のガラ紡産地では、昭和10年代中頃までは工場用動力としては水車が主流であった。岡崎、豊田の山間の各川筋には数百に及ぶ水車が掛けられていた。特に大きな動力を必要とした反毛工場（織物などを綿に再生する工場）では、直径6mを超す巨大な水車が設置された。



発掘された製材用タービン水車
(新城市、2004.3 筆者撮影)

■産業遺産として各地に残る水車



保存されたガラ紡工場の水車設備
(豊田市、2023.3 筆者撮影)

現在、大輪形式の在来型水車が産業用として稼働する姿はほとんど見られなくなった。水車も今では博物館に収蔵される歴史的遺産となっているが、観光用として復元される水車や水車小屋、レストランの店先で水車の回る例もちらほら見られる。中には、復元水車ではあるが博物館の館内で水を流してその動きを見られる珍しい展示例もある。村々で回っていた懐かしの「コトコトコトン」は今は昔の話となっている。



復元された米搗き水車小屋
(新城市、2011.8 筆者撮影)

(天野武弘)